

2017 年度 21 世紀かながわ円卓会議シリーズ①講演会（6/17 開催）

「私たちはいかにして分断を超えられるのか～障害者福祉・ヘイトスピーチ・生活保護から考える～」

パネルディスカッション（後半）質疑応答・概要

分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ

パネリスト

名里 晴美（社会福祉法人訪問の家 理事長）／ 三浦 知人（社会福祉法人青丘社 事務局長）

井手英策（慶応義塾大学経済学部教授）／ 小川 泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長／21 世紀かながわ円卓会議運営委員）

司 会

林 義亮（神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹／21 世紀かながわ円卓会議運営委員）

県内で次々と起こっている問題 ／ 自分の中にある差別 ／ 支え合う仕事を担う人材の育成

<林>

まず社会福祉法人理事長であり、円卓会議の運営委員でもある小川さんから、分断を乗り越えるということについてどのようにお考えになるかお話しいただけますか。

<小川>

私は昨年度の一年間、神奈川新聞に「紙面拝見」というコラム記事を書かせていただきました。この一年の間にやまゆり園の問題、ヘイトスピーチの問題、川崎の有料ホームでの高齢者の殺人問題、それから皆さんには、あまり記憶にないかもしれませんが、鎌倉で生活保護の人がパチンコをするのはけしからんというのが議会で通りそうになっていたと新聞に小さく掲載されていたが、それを見たとき、ぞっとしました。そういった問題がこの神奈川の中で次々起こっていて、これは「知らんがな」とは言えないなと。全部もしかしたら自分の中にある差別や区別ではないだろうかと受け止めていました。

とりわけ私は特別養護老人ホームを運営していますので、特にやまゆり園や有料ホームの問題などは人ごとではありませんでした。一番つらいと思うのは、いつでもうちの事業所でも起こり得ると思ったことです。それと同時に、なぜこれほど人が人を支え合う、助け合うことが必要とされているのに、それに携わる仕事は何と浮かばれない社会なんだろうと。

先ほど井手さんのパワポの 16 ページのところで、税を増やすことで、子育て・教育、医療、介護といったサービスを受けられる社会にしようよというお話がありましたが、これらは実際の担い手が必要になります。ロボットがするわけでもない、人を支え合うという仕事を担う人材をどう育てるかということが、国では全然議論されていません。資格を取得するための講座やテキストばかりができるので、そちらでは儲かっているのね、といった状況です。

資格だけではとても仕事はできない。しかし、人材を育てる環境をつくっていくためには、3K、4Kともいわれるこの仕事を、「あの仕事に就きたい」と思われるような、誇りを持てる仕事（私自身は、こんな面白い仕事はないと思っていますが）となるよう、より多くの人たちが共感できるようにしていかななくてはならない。

もう一つは、ヘイトスピーチもそうですけれども、三浦さんにお尋ねしたいなと思ったのは、今回、首長が福田さんだったことが、そのことで結果が出たのか。それから、小田原でもそうですけれども、やはり首長というのはとてもこれから重要だと思っています。もう国ではなくて、やはり分権の中で、その自分の住んでいるまちのトップがどうであった、どうなのかというのかなり影響するだろうなと思っています。

みんなが幸せになったらいいよねという想い / 人はそれぞれ人格がある

<林>

名里さんにお聞きします。施設が地域にできるということは、ちょっと触れられましたけれども、非常にあつきも生じることがあるといわれております。それを乗り越えるには何が経験から必要だと実感されていますか。

<名里>

30 年以上前のことですが、開設にあたっての地元説明会では、反対している人たちが並んでいて、説明する側に法人の代表や横浜市の職員がいました。説明の後に質問の中で、明らかに反対している人からの質問で「散歩に出ますか」という質問があったのです。私は会場の隅にいて、「これって、明らかに散歩に出ないでほしいという質問だったわけなので、何て答えるのだろう」と思っていました。

私の前の理事長の日浦さんが立って、非常に迷いながらも「出たいと思います」と言いましたら、会場に「どんどん出てきてください」と言ってくれた人がいて、私の当時の記憶では、それで何となく空気が変わっていった、何かいいんじゃないかという感じになっていったと記憶しています。「この人たちの何を大事にして、この人たちがどういう人生を送ってもらいたいからこの場所が必要なんだ」という思いを語り、そのことを受けとってくれる人がいた、ということだと思います。

さっき井手さんもおっしゃられていましたが、人って、みんなでわかり合って、みんなが幸せになったらいいよねという想いを持っているのではないのでしょうか。何かどこかで掛け違えてしまったり、何かどこか自分がいる居場所の生きにくさがあったりして変な方向に出てしまったりするのだろうとは思いますが。

私は、相手の気持ちがわかったときとか、わかり合ったときに、人は喜びのようなものを感じることがあるのだと思っています。そして、そういうものを感じるのは、この人がどんな人で、どんなことがうれしくて、どんなふうに暮らすことができたらいいいと思っているということを周りの人が伝えることでわかり合えたらと思っています。

<林>

取材にも答えていらっしゃいますけれども、人はそれぞれ人格があるんだということをお互いにわかり合えることが、まずそういった分断を乗り越えていく、一つ大きな手立てになるんじゃないかと、今私は話を聞いて思いました。

「俺たちが守るぞ」というたくさんの人たちの想い / 人権感覚や多様性を認める社会感覚のなさ

<林>

次に三浦さん、先ほどもお話しがありましたヘイトの問題について、川崎市がガイドラインを作ったということが今日大きなニュースで報じられていますが、まだまだ不十分であるという点はお感じではないかと思います。いろいろと活動されてきた立場から、これから社会に求められることはどういうことなのか、教えていただければと思います。

<三浦>

ヘイトスピーチのことについては、最も傷ついたのは「殺せ」「死ね」と叫ぶ人間に大変怒りを感じました。私らは2回襲撃を受けましたが、そのときに警察官や自治体は何もできない。じゃあ、いったい誰がうちのハルモニ、おばあちゃんたちや子どもを守ってくれるのか。そこで「俺たちが守るぞ」ということで、大変な悲壮感を持ってたくさんの人たちが集まってくれました。その背景には、市民が本当に「殺せ」「死ね」と言われているのだから、やはり市民を守るべき立場の人間たちが何で「そんなのけしからん、守るぞ」という一言が言えないのかという思いがありました。

同じまなざしで見るときに、言うべき人がまずちゃんと言えよというのを僕らは感じる事が非常に多いですね。相模原の事件も同様です。事件があったときに言うべき人が「これはけしからん」と適切に言えているのかといたら、この社会、ずいぶんと言えていないことが多すぎると思います。そういう意味では、公の立場のある人たちの人権感覚や多様性を認める社会感覚のなさに僕はうんざりするほど失望を持っています。

社会をつくるために、もちろん全般的に社会は変わっていかなくちゃいけないことは大きな思いとしてあります。とりわけ発進力のある政治家や長といわれる人たちが、地域社会の多様性とか、多文化共生とか、国際社会とか言っているのにこういう人権の問題が起きているのは何なんだと非常に強く思います。そういう意味では、近未来の中で、言うべき人がちゃんと適切に対応できるというところから始めてほしいという思いが強くあります。

また僕らの立場から見ると、川崎市長を動かしてきたのは市民であり、大きな流れの中での市長が差別に反対できるような環境をつくってきたということであって、市長の決断を迫ってきた活動ができたと考えています。

<林>

市民が動かしてきたということですね。

井手さん、これまでの話を含めて、お考えを聞かせていただければと思います (→次ページ)。

正義が複数存在している / 彼らを包み込んでいくためには何が必要か

<井手>

まず感じたのが、人種差別であれ、あるいは障害者差別であれ、差別は今だけあるものではなく、ずっとあるものだと思うのです。昔の悪しき共同体主義ではありませんが、要は村八分的に敵をつくる、差別をすることによって残りの人たちが連帯するという、その繰り返しがあります。そういった常にある差別としての障害者差別や人種差別に対して、人権という立場からそれはおかしいと言う。これが一つのかたちだと思います。

ただ、とはいいながらも、僕が今日すごく感じるのは、今の差別は、昔からある差別と同じなのか、違うのかを考えないといけない気がします。それはヘイトスピーチのお話も、まさかこんなことがということが今起きている。これはいわゆる昔からある人種差別と同じなのか、違うのかということをきちんと考えないといけない僕は思います。

僕が今日、講演の中で一番言いたかったことは、差別がいけないということは誰だってわかっているし、人権が大事ということは、一応表面的にはみんなわかっている話なはずですね。しかしながら、また形を変えた差別が今起きているという現象をつかまえた場合に、相模原の事件であれ、ヘイトスピーチであれ、それは差別をする側には差別をする側の独自のロジックがやはりあって、あるいは差別をせざるを得ないような寛容さのなさや苦しい状況が彼らの側にもあるという意識をプラスアルファしないと、どうしても人権は大事で、差別はいけないという枠を超えていけないような気がするのです。いけないことはいけない。でも、じゃあなぜいけないことをするのかというところに切り込んでいくことがとても大事な気がします。

今日僕が申し上げたかったことは、だから、弱者が弱者を攻撃するという視点を大事にしましょうというふうに申し上げたわけですが、ヘイトスピーチであれ、障害者差別であれ、差別をする側が社会的に極めて追い詰められた状況にあるんじゃないかという意識を、これはお二人がとか、皆さんが持つべきだというよりも、重要なポイントとして、僕自身が受け止めていかないといけないと、すごく感じている部分です。

それと、今と関連して言うと、今日は運動をやっておられる方もたくさんおられるんじゃないかと思うので、アリストテレスという古代のギリシャ哲学者です。彼が言っていることで正義が複数存在しているということは考えておいていいと思います。つまり、僕たちは自分がそれぞれの立場で正義を語りますよね。それが唯一無二の絶対的正義だとして語りがちです。これが要するに違う立場の人たちに対する怒りになって表れるわけですけど。

だから、例えば格差のことを林さん、僕におっしゃったけれども、例えば、じゃあ、格差はいけないから小さくしようというのはこれは一つの正義です。でもね、2倍頑張った人が2倍の給料をもらうって、これは不正義ですか。違うでしょう。2倍努力した人が2倍給料をもらうって、これは正義なんです。これは配分的正義というんですけど。要するに格差が存在する正義もあるんです。古代ギリシャの時代から、正義は一つではない、複数存在するということははっきりしている。そうすると、我々が正義だといったって、反対の人には何の意味もなく、相手の人々がまた違った正義を語る時に、じゃあ、彼らを包み込んでいくためには何が必要かということを常に考えないといけない。

なぜみんなが同じように苦しみを感じるのか / 思想と現場 (という車の両輪) で会話を積み重ねる

それはおそらく違いではなく、共通性に目を向けるということだと思います。これは先ほどアリストテレスと言いましたが、ルソーであれ、トマス・ペインであれ、あるいは悪魔のようにいわれるミルトン・フリードマンであれ、多くの思想家が共通して言っていることです。何が違うかをやり始めると社会は分裂する。何が同じかということを徹底的に考えたときに、社会は一つになる。

これが僕の今日一番申し上げたかったことで、それぞれの立場、それぞれの正義がある中でぶつかり合う。しかしながら、反対の立場に立つ人は反対の立場に立つ理由がある。とするならば、何が違うかで対立し合うだけではなく、これは大事なんですよ。だけではなく、何が共通で、なぜみんなが同じように苦しみを感じるのかという視点を入れていかないといけない。僕は少なくともこの問題を財政の領域からやっていきたいと思うわけです。全ての人間の利益、あらゆる人々が非人間的な、非道徳的な行動を取るときに、その人自身が未来への不安でおびえているということをきちんと受け止めながら、多くの人々が不安から解き放たれたときに、あるいは障害者差別であれ、あるいはヘイトスピーチであれ、今のようなものはなくなっていくかもしれないという希望を僕は持っています。人々が安心できるようになったとき、弱者が弱者をたたかなくてもいい状況が生まれたときに、また状況というのは変わっていくのかなと思います。

その意味で、僕のような思想家が国のマクロのレベルで思想を変えていこうと思うことと、現場でミクロの世界で目の前にいる人々の幸福のために何ができるかということを一生涯懸命考える、お二人のように考えておられる方と、これは車の両輪であると、僕は思っています。お互いが会話を、今日のように積み重ねていながら、攻撃する側の人たちがなぜ攻撃するのか。彼らが攻撃しなくていい状況をつくるために何ができるのか。私たちと彼らは何が共通しているのか。それは不安におびえているということではないのか。こういう視点が重要なかなと思いました。

あと、いただいた質問でいうと、例えば、ケースワーカーであれ、介護士であれ、何でも構わないのですが、専門性を高めていくことの重要性はよくいわれますよね。それは確かにそうだと思うけれども、では社会福祉士の専門の資格を持っているからといって、その人がケースワーカーになって本当にいいケースワーカーの仕事ができるかという、ちょっと違う感じがします。

重要なことは、まず根本的に税で人を増やすことが大事だと。と同時に、本来、障害者の問題であれ、生活保護の問題であれ、介護の問題であれ、全部そうなのだけれども、本来やるべき業務に専念できる状況をつくってあげることが僕は一番大事だと思っています。その中で、むしろ専門的な資格を持っている人たち (社会福祉士でも、精神保健福祉士でも構いませんが) は、むしろソーシャルワーカー的に、本来であればケースワーカーや介護士がやるべきでないことをたくさんやらされている人たちの負担軽減のための人たちであると。今日お二人とも、人々を地域に開いていくということをおっしゃっていて、それは大事なことだけれど、目の前にいる人の生活を支えることと、この人たちを地域に開くことって、一緒のようで本当は違うはずなのですよ。もっとその地域に開いていくような仕事を専門的にやっていけるような人たちを増やしていくべきだと僕は思うし、その人のための予算というのはきちんとつくっていくべきだと思っています。

この社会を生きる人々の寛容さの問題 / 寛容さを育む基礎としての生活の保障

最後に、林さんがおっしゃった格差の問題を容認する、これは聞こえが悪いことは僕も承知の上ですが、ただ、今日もお示したように、格差は小さくなるんですよ。僕のモデルで、まずね、このことはわかっていたきたい。格差は小さくなる。しかしながら、どこまで小さくすべきかと、どこまで大きな格差かというのは主観ですよ。ここまでやったら大丈夫って、絶対言えないのですね。とするならば、問題は結局、寛容さの問題なのですね。ヘイトスピーチの問題もそう、障害者差別もそう、この社会を生きる人々の寛容さの問題なんですよ。

では、私たちが寛容でいられるためにはどうしたらいいか。確かに格差がある。お金持ちがいる。でも、そのお金持ちに寛容でいられるにはどうしたらいいか。貧しい人がいる。格差がある。苦しんでいる。でも、この人たちにみんな苦しいけど寛容でいられるにはどうしたらいいか。この寛容さを育む基礎として、生活の保障や未来への不安からの解き放ちということを僕は申し上げます。

自己責任でできる領域とできない領域 / 一人ひとりの人間が共に在る感覚

<会場から①>

井手さんの今日発言していただいたことを肯定した上で申し上げます。前提条件で、収入が 200 万と 2,000 万の話がされましたけれども、収入がない人が多い。私も倒れましてね、収入がなくなりまして、それで何とか復帰したいから支援してくれって、そういう制度がないから生活保護を受けろと言われて、生活保護を受けたくないから働きたいんだということで、私は自己責任を肯定している人間なのです。

井手さんがおっしゃったように違うことに注目しないで、同じことに注目すると。つまり日本語で言うと、心を一つにして、同じ共同体というのですか、そういうものをつくっていけばいいのではないかと。

<井手>

僕は体を張って命がけでやっており、現にもう民進党の政策は変わったのですよ。すごいことだと思います。僕は実働部隊の最前線でやっている覚悟はありますのでね。その上で、自己責任を肯定するというのはおっしゃるとおりなのです。ただね、自己責任でできる領域とできない領域をきちんと区別しろというのが僕の言いたいことです。そして、自己責任でできる領域を自己責任でやるのは当然のことなのです。

しかしながら、人間にはさまざまな不幸や不運があって、自己責任だけではどうしようもない、あらがえないようなことが必ず起きる。例えば脳梗塞とおっしゃって、僕も硬膜下血腫で倒れましたけれども、急性硬膜下血腫でね。ですけど、僕は何の後遺症もない。今おっしゃったように後遺症が出る。これは運じゃないですか。運の問題ですよ。これは誰にもあらがえない。どうしようもない。しかし、そのときにどうしようもない部分まで自己責任と言われる社会はやはりおかしい。それがまず一つ。

それと、もう一つ。心を一つにする。これは英語では a sense of one です。いわゆる一体感なのですね。一体感、僕に言わせると全体主義の論理だと思います。そうではない。僕は a sense of togetherness と言いますが、共在感、共に在るという気持ち。何かの一つの心にみんなを合わせようとするって、僕は無理だと思います。しかしながら、共に在る、一人ひとりの人間が共に在る感覚というのは必ずある。例えば、運悪く病気になり障害を持つことになった人に対する人々の気持ち。子どもの無力さ、年を取った人間の無力さに対する人々の気持ち。病に倒れた人々への人間の気持ち。あるいは自然災害に襲われて突然命を失う人々への気持ち。これは一体感や

共生とは全く次元の違う、誰もが共に在る以上は必ず感じる気持ちのはずなのです。この部分を僕は財政の視点から、みんなで痛みと喜びを分かち合いながら誰もが安心して暮らしていける社会をつくるようにする。これは絶対に、無理に人々の心をつににするのではなく、必ず人々がそれは共通して感じることのできる感覚だと信じています。

だから、その意味で、心をつにすることと、共に在るというこの感覚とを僕ははっきりと区別しておきたいと思っています。

“中の下”の人たちは転落の恐怖におびえている / 人間らしい選択をするための生活保障

<会場から②>

グローバリズムという世界的な潮流はもう止められないのか、どうしようもないのか。その一方で、ヨーロッパでは移民排斥の動きもあります。そうしたときに、一つの処方箋がもしどこかにあるとしたら、それは井手さんがおっしゃったような形なのか、あるいはトランプがグローバリズムを否定すると言いながら、今、実際に何が起きているかということを見たときに、我々はこれをどう考えたらいいのか。あるいは世界的潮流を止められないのだとしたら、そこに井手さんが提案されたこと自体も押し流されていってしまうのか、そのあたりの井手さんの思いをお聞かせ願いたいと思います。

<井手>

例えばアメリカのトランプ政権、イギリスの Brexit がありますね。実は日本もここに近いのですが、要するにアングロサクソンモデルといわれる小さな政府のモデルです。それら国々においては、小さな政府といった場合、たいていが貧しい人にお金を使う政府になっています（みんなにお金を使うと大きな政府になりますので）。小さな政府というのは、貧しい人にさまざまなサービスを提供する政府であり、多くの人々は自己責任で生きていく社会になります。これはイギリスもアメリカも日本もそうです。

問題なのは、アメリカもイギリスも日本も中間層がどんどん貧しくなっているのです。そうすると、この人たちが、自分たちの生活がどんどん不安定化していくのに、あからさまに一部の特権階級の人々が利益をもらっていることが見えるような社会状況が生まれているわけです。その中で、実はアメリカもイギリスも“中の下”の反乱が起きているのです。Brexit のときに離脱を声高に叫び始めるのは“中の下”の前後の所得階層なのです。そして同時にアメリカで、かつてのオバマのようにヒラリー・クリントンを支持せずにトランプに流れている層は“中の下”の前後の層なのです。

何を言いたいかというと、“中の下”の人たちは転落の恐怖におびえているのです。この人たちがイギリスであれば移民が悪いと、あいつらがおまえらの福祉を食い散らしている。あいつらがおまえらの仕事を奪うといって、反移民的なロジックで離脱を選ぶわけです。アメリカであれば、同じように移民や、あるいは低所得層がおまえらの福祉を食い散らしている、おまえらの仕事を奪っているといって“中の下”の人たちを脅すと、彼らがトランプを支持するわけです。

この転落の恐怖をあおることがポピュリズムの本質であり、実は先進国の中で一番“中の下”と考えている国民の割合が高い国は日本です。同じことが日本で起きます。実は安倍さんがやっていることも恐怖心をあおるという意味で、本質的に同じなのです。

ところが一方で北欧を見てもそう、フランスを見てもそう、選挙を見てください。極右勢力が出てくる、反移民が出てくる。ところがギリギリのところ踏ん張る国があるでしょう。生活がきちんと保障されている国ですよ。その人たちは転落の恐怖から解き放たれているのですよ。だから、最後の最後でポピュリズムが効かない、

極右が効かない。だから踏ん張るのです。この大きな違いが僕は重要だと思っています。

ですから、今日僕が皆さんに申し上げたのは、転落の恐怖におびえる人々をたきつけて、移民あるいは外国人の労働者や低所得層をたたき世界を目指すのか。そうではなく、そのような動きがグローバリゼーションの中でやむを得ないとしても、なお踏ん張って人間らしい選択をするのかという分岐点にある中で、僕は後者に行けるような道を申し上げたと。

【参考】～井手英策『財政から読みとく日本社会―君たちの未来のために』(岩波ジュニア新書・2017 年発行) より

～～～

日本のどこかでくらす人たちを直接自分と結びつけ、その人たちのことを想像するのは簡単なことではありません。だからこそ、地域社会のなかに共感の領域をつくりだし、その延長線上へと「私たち」の領域を押しひろげていくことが大切です。国の税金を使って困っている人たちをささえるやさしさは、身近な社会での共感の先にあると思いませんか。(212 ページ)

～～～

(以上)